



大地の恵みを人が奏でる だれやめの郷

広報

いさ

2022.12

ISA City Public Relations No.337

特集

ひとりじゃないよ

特別支援学校とともに描く未来



つくる会
Tsukuru kai

住みよいまちに

伊佐・湧水の子どもたちのなかには、特別な支援が必要な子がいます。その子どもたちは、毎日往復2時間以上かけて出水養護学校（※）に通っています。

今月号では、「支援が必要な子どもたちに負担を強いる教育環境を改善したい」と活動を続けている「伊佐市に新しい特別支援学校をつくる会（以下、つくる会）」のみなさん取材しました。伊佐市は、生活圏を同じくする湧水町のみなさんと協力し、県教委・県議会に対して県内どこに生まれても、住んでいる地域で学べる特別支援学校の設置を要望しています。

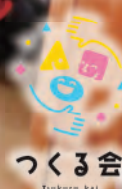
すべての人が「住みよいまち」とはどんなまちでしょうか？交通の利便性、買い物施設の充実、医療体制の確立、治安など、どれも快適に生活するための重要な条件です。そして、それらすべての要素の根本にあるのは、

※鹿児島県では、令和5年4月1日から「養護学校」から「特別支援学校」に名称が変更されます。

特集

ひとりじゃないよ

特別支援学校とともに描く未来



体操や歌あそび、学習発表会の練習など、一生懸命に授業をうける山口幸大くん。

その地に暮らす人の「心の豊かさ」ではないでしょうか。

障がい者を正しく理解し、多様性について考えることで、伊佐がめざす未来像がみえてきます。



ハロウィン楽しんだよ!

学校も友達も大好き!

伊佐市大口に住む山口幸大くんは、出水養護学校中学部2年生。生まれつき重度の脳性まひのため、四肢不自由で呼吸障害があります。

人工呼吸器を使用した皆さんの医療的ケアが必要な幸大くんは、出水養護学校へ通学することはできず、週2回の訪問教育をうけています。「幸大はほんとに学校が大好き!ビデオメッセージや教室の映像をみながら、

友達と一緒にいる雰囲気を楽しんで

しているようです」と話すのは母親のみゆきさん(写真左)。

特別支援教育では、児童生徒

一人ひとりの個性に応じた柔軟な授業が行われています。身体

を自由に動かすことができない

幸大くんにも少しでも授業を楽し

んでもらおうと工夫を凝らす大

久保裕子先生(写真右)は「幸

大くんは好奇心旺盛で、『僕も

やりたい!』としつかり目で訴

えてくるんです」と笑います。



学校が近くにあったなら…

大好きな友達と会える機会も

増えるのに…

伊佐―出水間の道路は、急

カーブも多い峠道。体調を崩し

やすい幸大くんにとっては、身

体への負担が大きく、これま

で学校行事に数回登校するのが

やっと。

「毎日体調の心配も多く、な

かなかたくさんのことを経験さ

せることは難しいんですが、い

つまでも元気に人生を楽しんでほしいです」と、みゆきさんは優しく幸大くんを見つめます。

できることが限られているか

らこそ、子どもたちにできるだけたくさんの「楽しい」や「うれ

しい」気持ちを感ずる機会を増

やしてあげたい。

それが「つくる会」の願いです。



11月4日に学習・意見交換会を開催した「伊佐市に新しい特別支援学校をつくる会」のみなさん。一日も早い学校設置をめざして「心はひとつ!」。



こんな学校ができたなら

空き校舎の活用
分校体制
専攻科設置

※専攻科とは、高等部を卒業した青年期の人がゆっくり、じっくり学べる場。

つくることがゴール?
いいえ!

めざしているのは

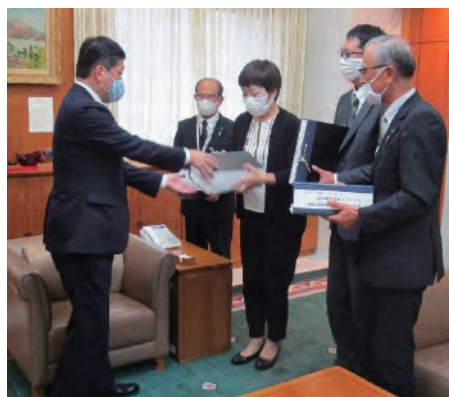
学校を中心とする地域づくり

心をひとつに



2016(平成28)年2月に活動を始めた「伊佐に新しい特別支援学校をつくる会」は、子ども発達支援センターたんぽぽ卒・在園保護者たちが中心となり結成されました。子どもたちに通学の負担を強いる現実や将来の不安を話し合ううちに、「地域に根差した特別支援学校をつくってほしい」と約20人が立ち上がりました。

「はじめの頃は、何から始めたらいいのかから不安もありました。市民のみなさんに存在を知っていただくために、学習会や意見交換会を開催したり、夏祭りのパレードに参加したり、チラシを配ったり、手探りでの

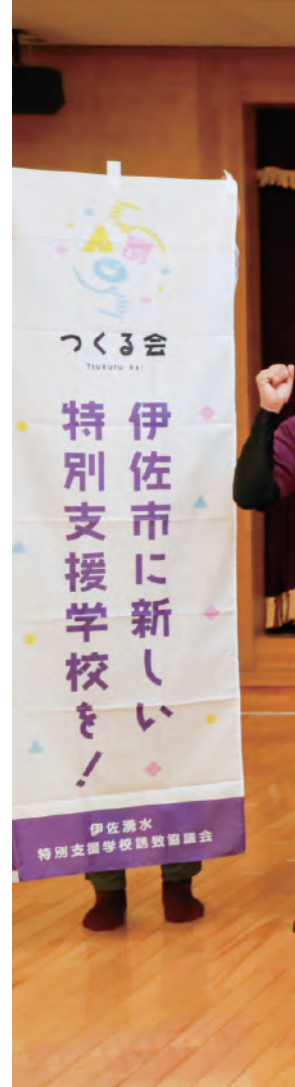


塩田知事に、署名と要望書を提出。県は令和4年度中に提言をまとめると回答しています。

活動を続けてきました」と話すのは、「つくる会」代表の大谷暁子さん(最前列左から2番目)。

そんな地道な活動の成果として、特別支援学校設置を要望する署名には市内外から19,036筆も集まるなど、県内でも広く知られるようになりました。

築瀬桃子さん



切れ目のない支援を

「おぎゃー献金」発祥の地でもある伊佐市は、他市町村に先駆けて0歳からの親子教室や療育に取り組むなど、「子育てしやすいまち」として乳幼児支援の充実を進めてきました。しかし、障がいを抱える子どもたちは、学齢期（6歳〜）になると特別教育の支援を求めて出水まで通学しなければなりません。これにより、それまでの支援や地域との交流といった築き上げてきた人間関係が途切れてしまっているのが現実です。

「伊佐の保育園・幼稚園に通っていた子どもたちが出水養護学校に通うことで、伊佐に住んでいるのに地域の子とも認識されない寂しい現実を変えたいんです」と話すのは副代表の築瀬桃子さん。「私たちは、自分たちの子どもだけに特別な待遇を

求めているわけではありません。すべての親御さんが子育てに関して悩みを抱えていることも理解しています。しかし、小学部・中学部は義務教育で、ましてやしんどさを抱える子どもたちが最長12年間を毎日往復2時間以上かけて通学することはあたりまえのことなのでしょうか。子どもたちに我慢を強いている教育環境の改善は、私たち大人の責任です」と思いを語ります。



湧水町との合同学習には、たくさんの参加者が集まりました。

つながるよ

出水養護学校に通う子どもたち



も一人ひとり障がいの状態や特性、心身の発達段階が異なります。小田原誠信^{まことぶ}くん（10歳）は、肢体不自由と知的障がいの重複障がい、2歳の頃に脳性まひと診断されました。筋緊張が強く、移動には車いすが欠かせません。父親の宏さんは「誠信がこのまま社会から忘れられてしまうのではないか不安です」と胸の内を語ります。

幼少期には適切な療育を受け、地域の保育園にも通っていた誠信くん。学齢期になって出水養護学校に進学してからは、保育園時代の友達との交流はほとんどありません。「地域のみなさんから、息子の存在が意識もしてもらえないことほど悲しいことはありません。もし自分が倒れてしまったら：誠信が地域から孤立して、誰からも助けてもらえない最悪の未来を想像してしまいます」。

学校を交流拠点に

「すべての障がい者が社会から孤立しないためにも、教育・福祉の中核となる施設が必要です」と強く訴える小田原さん。「特別支援学校は、子どもたちの成長を地域全体で支え、障がい者と健常者を繋ぐ交流拠点になります。日常的にふれあう機会ができれば、障がい者は自然に社会に溶け込むことができ、伊佐市の子どもたちや市民のみなさんも、福祉の心を学ぶきっかけになります」。

その結果、学校の存在が障がい者に対する社会の認識を変え、近い将来市内にもっと障がい者が働ける場所が増えることも期待しています。



出水養護学校は

一人ひとりの

「できた！」を大事に

校長先生に特別支援教育の環境や生徒の様子などを伺いました。



奥 政治 校長

— 学校の特色を教えてください。

本校では、小学部から高等部までの12年間、一貫した教育環境のもとで子どもたちの成長を見守っています。生徒一人ひとり障がいの重さや支援の程度も違いますので、個別に教育支援計画をつくり、その子のニーズに合ったきめ細やかな教育を行っています。

— どのような子どもたちが通っていますか？

現在、出水市・伊佐市・さつま町など近隣の9つの市町に住んでいる253人の児童・生徒が在籍しています。北薩地区で唯一の特別支援学校ですので、学区範囲も広く、スクールバスは7路線で運行しています。

— どのような授業をしていますか？

特別支援教育では、一般的な国語や算数などの教科書に沿った授業は行っていません。少人数学級で、担任の先生が子どもたちの理解度にあわせて学習内容を考えています。

例えば、文章を書くことが難しい児童には、文字が書かれたシールを並べたり、先生が書いた文字をなぞったりして学びます。自分で文章を書くことはできなくても、「これなら自分もできたよ」という経験が、子どもの自信につながるのです。

— 一般校と違う点はどこですか？

設備の面で、トイレや廊下の広さ、エレベーター・スロープ・手すりの設置などバリアフリーに配慮しているところは、大きく違うところだと思います。また給食は、子どもたちの飲み込む力に応じて、固形食や流動食など4種類を準備しています。

他にも、看護師3人・養護教諭2人が常駐して、子どもたちの体調の変化に対応しています。医療的ケアが必要ななど、さまざまな障がいを抱える子どもたちが学ぶ場所なので、職員も全力で子どもたちの成長を支えています。

保護者の声

幸太郎は、今年4月から小学部に通う1年生です。小さく生まれたために周りの子より発達が遅いところがあります。入学直後はスクールバスに乗りたがらず、とても心配でした。しかし、先生方のおかげで学校が大好きな場所になったようで、学校での出来事をうれしそうに話してくれます。就学前はたくさん悩みましたが、のびのびと楽しく学校へ通う息子の成長に、特別支援学校を選んでよかったと思っています。

(つくる会 川野 理沙)



IZUMI

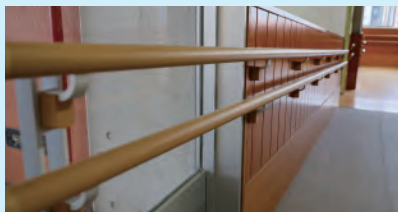




リフト付きのスクールバス。車いすでも乗れるよう、車内の通路は広くなっています。



右／高さが違う2段の手すりや、広い廊下、エレベーターなどバリアフリー機能が充実している校舎。



右／わかりやすく動きをイラストにして、くり返し子どもたちに動作を教えます。



左／トイレと直結している教室。間に合わなくてもすぐに洗い流せるよう、シャワーもついています。



ふたつの学校が 同じ敷地に!?

小林こすもす支援学校



菅 竜朗 校長

普通校と特別支援学校が共存する併設校
その教育環境は、まさに「つくる会」が理想とする
モデル校です。

社会にでる準備

宮崎県小林市にある「小林こすもす支援学校」は、平成17年4月に都城養護学校の分校として開校し、令和2年4月に本校化。現在は、75人の子どもたちが在籍しています。

本校の特徴は、小林市内の小・中・高校と同じ敷地に併設されているところです。たとえば、高等部は小林高校と校舎の一部を共用し、1階で支援学校の生徒が、2・3階で小林高校の生徒が授業を受けています。
本校は、教育目標のひとつとして「自立する力」の育成を掲げ、

卒業後を見通した段階的な学習を大切にしています。

一つの例を挙げると、本校の小・中学部の児童・生徒はスクールバスで通学するのに対して、高等部の生徒には電車や市バスなど公共交通機関での通学を指導しています。在学中に乗り方・過ごし方を習得して、卒業後のスムーズな社会参加に繋げる狙いがあります。

障がいにも理解ある若者

併設校の強みは、両校の子どもが自然体で交流できるところです。日常的に廊下であいさつを交わしたり、合同の学校行事や昼食・掃除

除などを行なったり、盛んに交流しています。

この教育環境は、小林高校の生徒たちにとってもプラスだと感じています。実際、小林高校を卒業した教育実習生の中には「高校時代に障がいを抱える生徒とふれあった経験が、教職を志すきっかけになりました」と話してくれる人もいます。

生徒の進路選択の動機づけになつていくことがうれしですし、障がいに理解ある若者が増えて、社会を支える人材に成長していくことが頼もしいです。

併設校での学校生活は、社会で生きる学びが詰まっています。



卒業後もこのまちで

「働くって楽しいです」

障がいを抱えながら、いきいきと働いている方々がいます。多様性を認め合うことは、すべての人の居場所をつくることです。

安心できる場所

大口曾木にある曾木食彩かまど（社会福祉法人ひまわり福祉会）では、現在19人の「なかまたち」が働いています。草刈りなどの農作業や食品の袋詰め作業を担当している宮元義武さんもそのひとり。

高校を卒業後、一度は市外で就職しましたが、さまざまな事情で長くは続きませんでした。「僕は人付き合いも、何か新しいことを覚えることも苦手です。だから都会ではとても生活できませんでした」と、一度ふさぎ込んでしまった過去があるといいます。そんなつらい時期を乗り越え、ふるさとに自分の居場所を見つけました。「ここでの作業は難しくなくて



上/手作り味噌は、米麹を使っているため甘くておいしいと大人気。難しいかまどの火加減も、慣れた手つきで薪をくべていきます。「わたしに任せて！」

ですが、やりがいを感じています。それにかまどのみんなは自分の感情に正直だから、僕も変に気を遣わなくてよいので気持ちいが楽なんです。おかげで毎日が楽しいですよ」と充実した生活を送っています。

ゲームが
大好きです！



社会のなかま

かまど直売所では、手作りの味噌や焼き菓子（ワッフルやドーナツ）などを販売。管理者の久保志保さんは「なかまたち」にとつて、ここは地域との接点なんです。お客さんとの交流が、働くことの喜びややる気につながっています」と話します。

また、地域のみなさんから顔を覚えてもらえることで、有事の際に助けてもらいやすくなる側面もあるそうです。

自分も社会の一員だと実感できる地域こそ、「住みよいまち」なのではないでしょうか。



曾木食彩かまど

伊佐市大口曾木 1281

TEL：25-2106

営業時間：10：00～17：00（日祝休み・土曜不定休）



取材の最後に、

「私たちにできることはありますか？」
と質問しました。

「子どもたちを自然に受け入れてもらえたら
うれしいです」と大谷代表は答えました。

寄り添う

「知的障がいを抱える子どもの中には、感情のコントロールが苦手
でパニックを起こす子もいます。地
域のみなさんが障がいを理解し、温
かい心で接してくださることで、私
たちは救われる気持ちになるんです」。

急激に進む人口減少や超高齢化に
伴う社会問題は、伊佐市も例外なく
直面しています。人口2万4000
人の小さなまちが地域社会を持続し
ていくためには、未来を担う子ども
たちや子育て世帯が、伊佐に魅力を
感じて住み続けたいと思えるまちづ
くりが求められます。

すべての人がお互いを尊重しあい
ながら住み慣れた地域で安心して
暮らし続けられるように、
今日から、できることから。

ひとりじゃないよ

特別支援学校とともに描く未来

